国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」発表(於名古屋大学) 2011.9.11

いわゆる主要部内在型関係節の形式と意味と語用論
---〈全体〉と〈部分〉から複文構文を考える---

坪本篤朗
（静岡県立大学）

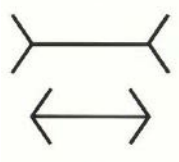
Keywords: 生き生きとした時間　間主体（主観）性　関連性条件　「それ」　内と外の視点

1. 複文と〈全体〉／〈部分〉

表現主体がどのような視点をとり、またどういう表現形式を用いるかによって言語主体の〈主体性〉のありようを捉えることができる。我々の認知の働きは、断続する境界を何らかの形で補い、ひとつのつながりにしたり、与えられている以上のものを見ているとも言える（下記(a)-(c)）。一本の流れとして表象されるリアルな時間そのままでは「現在」という時間は捉えられない。そうした流れのなかで「現在」をとらえなおすには、世界の外側からの認識重視の立場でなく、世界の内側に入り、行為的な立場に立つ必要がある。それは、他者を含めたさまざまな存在者（および存在者間の関係）に対して相互関係をもつことを意味する（間主観（体）性）（下記(d)は「坂道が下る」と「（バイクで）坂道を下る」と自己の位置を知る）。

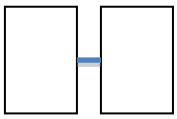
(a)

(b)


(c)

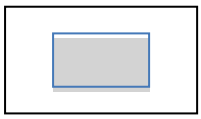
(d)

複文：２つ以上の文からなる。(1)のような類型が従来から提案されている。

(1) a.

等位

b.

連位

c.

従位

(cf. Hopper and Traugott (1991)、[ii]Foley and Van Valin (1984), など)

〈部分〉と〈全体〉の関係について、①〈全体〉がだんだん分化していく，②断片的なもの（部分）が結合されて〈全体〉を構成する考え方がある。本発表は、特に、①の観点から、いわゆる主要部内在型関係節を中心に取り上げ、複文構文の形式と意味・語用論的性質を考える（先の文献は、②の観点からと言える）。

2.　いわゆる、主要部内在型関係節 (Head-internal relative clause)：以下、HIR で総称する）

2.1. 融合体(amalgam)としての HIR

まず、議論の前提となる HIR の「の」節の構文機能について、若干おさえておかなければならない。

(2) a. 太郎は [リンゴが皿の上にある] のを取って食べた。　　（内在主部）

b. 太郎は [[皿の上にある] リンゴ] を取って食べた。　　（外在主部）

「の」節を副詞節だとする副詞節分析では、(3)において「の」節内の NP と共指示のゼロ代名詞が仮定される。

(3)　[[… NPi ….]の] を／が ……proi ….V

(4) a. [雨 i が激しかった] のが proi やんだ。 [e]=pro （音形をもたないゼロ代名詞）

b. 私は [女房がウナギ i を注文しておいてくれた] のを proi 食べた。

坪本 (1995, 1998, 2001))では、「類像性 (iconicity)」に基づいて、補語（項）と副詞節との間には(5)のような「融合度」に応じた階層性があるとした。さらに、連結のスキーマとして、HIR とは、本来、補語（項）としての側面と付加詞句としての側面の融合体（アマルガム）とし、この融合体は、(6)のような図式によって表した（詳細は、坪本 (1998, 2001, 2009)）。注意すべきは、「それ」およびそのゼロ形式は副詞節説のように「の」節内部の当該の NP と共指示ではないことである。（この点は、誤解されていることが多い。束縛条件に基づいた当初の外置分析の影響だと思われる。この点はここでは、ふれない。坪本 (2001)参照。）

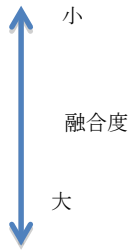
(5) a. [$_{S1}$ 暴漢が襲いかかってきた] 。[$_{S2}$ 警察はそれを組み伏せた] 。

b. [暴漢が襲いかかってきたの] を、警察はそれを組み伏せた。

c. 警察は [暴漢が襲いかかってきたの] を、それを組み伏せた。

d. 警察は [暴漢が襲いかかってきたの] を [pro] 組み伏せた。

e. 警察は [暴漢が襲いかかってきたの] を組み伏せた。



(6)

分離（連結型）　　統合（埋め込み型）

副詞節　　複合名詞句／補文節　〈HIR〉

2.2.　「それ」

「それ」について、坪本 (1995, 1998)で３つのタイプを提案している。問題は、(7b)。

(7)　《個体指示 (individual-denoting *sore*) 》：

a. すみません、それを取ってください。（「それ」は「本」などの個体）

《個体・状況指示 (individual/situation denoting *sore*) 》：　「それ」＝もの／こと

b. 出て行こうとする太郎。部長はそれを呼び止めた。　　〈ト書き連鎖〉

《接続機能 (conjoining function) 》

c. 今日の繁栄は私の経営能力に負うところが大きいんだ。それを、その一部でもあんな犯罪者にむざむざ渡すつもりはない。

「それ」（個体／状況指示）は、２つの出来事の間になにがしかの緊迫感、さしせまった感じが伴いやすい。そのために、恒常的な事態であったり、時間的な間隔があいているような場合には、「それ」を用いると不自然になる（cf. (10)-(12)）。(9)で「彼（女）」よりも「それ」の方が緊迫感がある。「それ」（個体／状況指示）は、「個体」と「状況」の間に傾斜度がある。

(8) a. 警察は [ドロボーが逃げる]のを｛*彼／それ｝を捕まえた。

b. 暴漢は[久美子さんが逃げようとする]のを｛*彼女／それ｝を押し倒した。

(9)　太郎が部屋から出て行こうとしていた。陽子が｛それ／彼｝を呼び止めた。

(10) a. 太郎が台所で料理を作っていた。花子が｛*それ／彼｝を愛していた。

b. 係長が出て行こうとしている。｛彼（彼女）／*それ｝はとても背が高い。

(11) a. 太郎はとても背が高い。｛彼／*それ｝は今部屋から出て行こうとしている。

b. 妻はとても美しい。｛彼女／*それ｝は今隣の部屋でピアノを弾いている。

(12)　部長が出て行こうとしていた。社長は数日後に　｛彼／*それ｝を会議室に呼んだ。

(坪本 (1995, 1998), Fuji (2000))

ト書き連鎖（以下で、少し確認する）と HIR とは、「それ」を介在すること、同時になにがしかの時間上の緊迫感（間合いといっていい）を伴うという点で共通している。（上記の例は、Fuji (2000)が坪本 (1995, 1998)の意を汲んで作った例が含まれる。）

(13)の制約を仮定すると、(8)で「彼（女）」が不自然なのは「の」節が目的語であるからであり、(14)が自然なのは、「の」節が付加詞（副詞節らしくなる）として機能しているからだといえる（「の」節との隣接性と関係する）。そこで注目されるのは、「それ」の振る舞いである。

(13) 二重目的語制約（柴谷 1978）以下、詳しくは、坪本 (1995: 87, 2001)。

a. *太郎は花子を 本を読ませた。　(cf. (8a, b)の「彼（女）」との共起可能性)

b. 太郎は急な坂を 自転車を一生懸命押した。

(14) 暴漢は[久美子さんが逃げようとする]のを、後ろから｛彼女／それ｝を押し倒した。

「それ」と「の」節との間には、(15)のような関係があるとする。つまり、「それ」が (i) 具体な指示対象物（モノ）をもっている場合には、「の」節は副詞節、(ii)「の」節によって表されるような状況（コト）を指示しているような場合には、「の」節は補語（項）ということである。このように、「それ」には、「コト」と「モノ」としての側面（状況とその状況下の個物としての側面）があり、それは取りも直さず「の」節のもつ「両義性」が顕在化したものと考える。このような「それ」と「の」節の関係は、(16)のような it と when の関係に類似しており、状況

としての「それ」は英語の虚辞的ふるまいをするということができる（it が指示語か虚辞かで when 節が副詞節か補語となる。この種の英語構文については、鈴木 (1991)参照）。このような「それ」は接辞的 (clitic)と言っていいのではないか（(14)で「それ」が「の」節に隣接している方が自然だと判断する話者がいることとも関係していると考えられる）。

(15)

	「それ」	「の」節
(i)	+指示物 (指示語)	副詞節
(ii)	+状況 （虚辞的）	補語（項）

(16) I hate it when/that he is singing.

三原・平岩 (2006:165)では、「の」節を外在主部名詞句と関係づけることの非妥当性を意図して、(17a, b)の対比がなされている。そうした意図とは別に、(17b)が不自然なのは、(13)の制約による。ここでも(18)のように「それ」とすれば可能である。下線部どうしの関係は(7b)の「それ」と同じであるが、ここでも「それ」には、(15)の２つの関係があると考えられる。

(17) a. 暴漢は、[久美子さんがにげようとする]のを、鉄パイプのようなもので彼女を殴って死亡させたものらしい。 （三原・平岩 (2006:165)）

b. *暴漢は[逃げようとする]久美子さんを、彼女を殴って死亡させた。（同上）

(18) 暴漢は[逃げようとする]久美子さんを、それを殴って死亡させた。（「それ」≠目的語）

3. 現場性とタイミング――ト書き連鎖と主要部内在型関係節

HIR とト書き連鎖には、タイミングと言ってよいような、時間に対する間合いがある。

(19) タイミングとは、わたしが行為的に世界と関与するときにのみ、世界との接点に発生する現象（現場性）である。タイミングとは間主観的な現象であり、同時に「生き生きとした現在」（アクチュアルな時間）が開けて時間が流れはじめる。(木村 (2000:175))

(20)「客観的時間」あるいは「時計時間」: 測定可能な時間，線的に表象されてその線上で前後の順序や各時点の間隔の大小を云々することのできるような「時間」

「現場」とは安定に対する不安定，継続や反復に対して，一回こっきりであり，どのように起こるのか予測がつかない，変化を内包している。「つねならぬもの」である。

(21) a. 殺人の現場／*場 b. 憩いの*現場／場 （坪本 (2009: 311)）

ところで、ト書き連鎖モノ＝コトの連鎖であり、自己対比 (self-contrast)――つまり、同じものの状態の変化――を特徴とする（坪本 (1992, 2009)など）。さらに、この連鎖が用いられると、事態進行のスピードに変化が生じ、それに即応するように、我々読み手もその流れの変化―タイミングと言っておく―に巻き込む。それが緊迫感とか体験性を感じさせるのだろう。

(22) a. レンコ，バス停に止まっていたバスに飛び乗る．閉まるドア．（「お引っ越し」）

b. 刑務官が取り囲んで席に座らせた。着席後、松本被告は右手で左側の刑務官の肩を

つかんだ。ふりほどく刑務官。今度は左手で左側の刑務官をつかむ。「朝日新聞」

(23) a.（おとよは）木サジで薬を口元に運ぶ保本の手をパッと撥ねのける．むっとする保本．そこへ赤ひげが来て交替する．　(都築政昭『黒沢明と「あかひげ」』)

b.　それから二年，ほおずき市の夜の賑わいの中で，背に赤ん坊を背負ったおなかを佐八は見つける．立ちすくむ佐八，その時，背後の風鈴がいっせいに鳴り出す．（同上）

同じような時間の流れの変化（タイミングと呼んだ）は、HIR にも感じられる。この場合つながれた２つの出来事の「間」に於いてである。この「間」の時間は伸び縮みする（つまり、客観的な時間ではない）。(24a, b)のように瞬間的な意味合いから、時間の幅が感じられる場合がある。しかし、いずれもなにがしかの「間合い」とか「契機」といったいことが感じられる。つまり、ここでの時間は異質的な連続的流れとしての「内包量」であり、等質的で空間的に分割可能な「外延量」（つまり、部分が積み重なって全体になる）ではない。

(24) a. 朝青龍が 千代大海が突っ張ってきたのをかいくぐって、けたぐりで負かした。

b. 日本選手は 中国選手が激しいスマッシュを打ってくるのを打ち返し、激しいラリーの応酬となった。

c. もう梅雨に入ったのであろうか、その日も朝から薄暗い細雨にけむっていたのが、ようやくぱっと晴れて、美しい日の光が庭の樹々をかがやかせたときがあった。（「眼中の悪魔」）

d.　推古仏というのは、高さ二十センチぐらいの小さな仏像ですが、七世紀ごろの作品で、たいへん貴重な宝物なのです。それを、あるお金持ちからかりだして、岩谷美術館に陳列することになったのを、博士が一時あずかって、本を入れてある書庫の中においてあったのです。（江戸川乱歩）

4.　HIR の成立にとって、「同時性」「同一場所生起」とはどういう意味合いをもつのか。

4.1. 関連性の条件を再考する

本節では、HIR の成立条件との関係から、特に、「同時性」「場所の同一性」の問題を考える。まず、HIR の成立条件「関連性の条件」Kuroda (1975-76: 86)に関して(25)を見てみよう。

(25) (i) この構文が許容されるために、主節の語用論的な内容と直接関連するように、「の」節は語用論的に解釈される必要がある。

(ii) ２つの節の内容は、語用論的に密接に連結されて、ひとつの superevent を構成すると考えられる。　→ superevent とは何か？

(iii) a. 同時性　　b. 同一場所　　c. 緊密な語用論的関係

Nomura (2000)は、Tsubomoto (1981)が黒田の本来の規定である(25i), (25ii)に対して、(25iii)のように、同時性と同一場所性を同列に扱ったことについて批判し、(26)のように主張している。

(26) 同一場所性、同時性の解釈は、HIR 構文が許容されるための必要条件でもないし、十

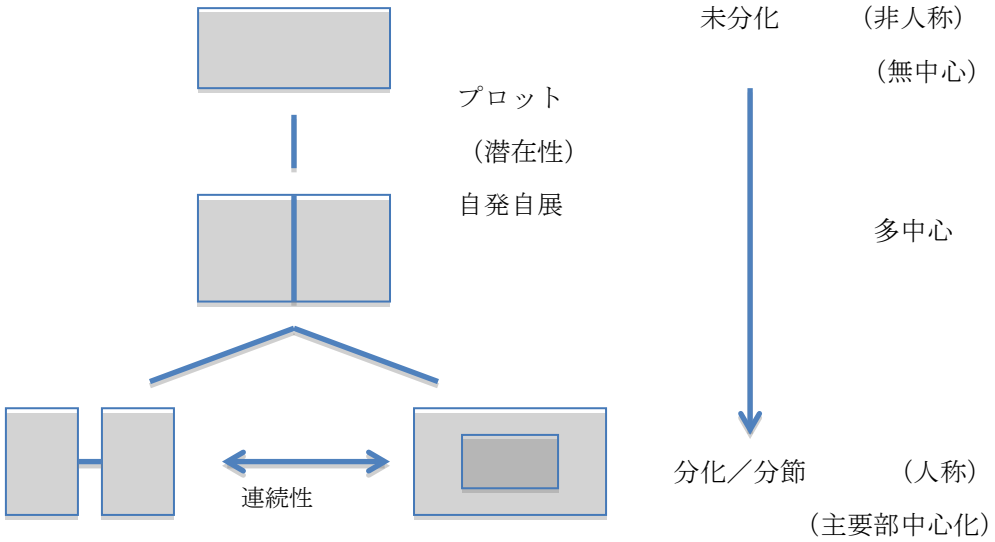
分条件でもなく、許容性条件(acceptability conditions)ではない。(Nomura 2000: 146)

が、問題は、「同時性」および「場所の同一性」をどのように考えるのかということは、本発表の立場のように、時間が伸縮すると考えれば、また別の考え方も可能になってくる。

4.2. HIR の本質

まず、先回りして、HIR を複文構文の中で位置づける(27)のようなスキーマを提示する。

(27)



[（注）「非人称→人称」としたのは、坪本(2009:334)の修正。「中心」とは「主要部」のこと]

Kuroda (1975-76)のsuperevent は、ここではプロットに相当すると考える。プロット (plot)とは、「筋」といってよい。それは明確に固定されたものではなく、現場に即応して、言語主体の思いや感情が込められる。「筋」という点で、「話しにならない」と言えても「語りにならない」と言えないことから、単なる「話」と違う「語り」としての側面をもっていると言える。

そこで、以下の議論と関係するいくつの立場を下に列挙しておこう。

(28)〈語り〉: ①すでに完結した実体概念の「物語」、②生まれつつある状態の「物語り」（野家啓一『物語の哲学』 (2005)）。②の〈語り〉特徴：語り手と聞き手とが形づくる共同の「場」 ((21)の意味では、現場にあたる)に求められる。ここでは、②の立場。

(29)アクチュアルな時間：「いま」の生き生きとした存在がすべて。昨日の事件も明日の予定も、アクチュアルな時間の中ではいまのわたしの思い出であり、いまのわたしの期待である。（木村敏『偶然性の病理』 (2000: 16)）

(30) 想起論は過去の出来事と主体との関係において、過去の出来事を今ここにおける主体の行為との関係の中で想起するという現象を捉えている。(大橋靖史『行為としての時間』 (2004: 45))

(31) 「記憶」とは、はじめから潜在的で相互浸透的にむすびついた一連のものである（(27)では、プロットにあたる）。「想起」とはそうした錯綜としたあり方を解きほどく。

（檜垣立哉『西田幾多郎の生命哲学』(2005)）。

ところで、(27)には(32)のように、２通りの見方があると考える。

(32)①主体の側からの視点（主観が客観を主観化）：言語表現は世界についての主観表現

②世界の側からの視点（客観が主観を客観化）：自己を状況に埋没／世界の自発自展

①は通常の見方といってよいが、ここでは②が眼目で、(33)に見るように、世界の側から見るとは、状況の中に自己を埋没させることであり、自己と世界とは知覚の世界では分離できないということである。それは自己を客観の反映として捉えていることになる。

(33) a. Tokyo is approaching. （東京が近いぞ。）自己の位置を知る。（東京に近い所にいる）

b. 坂道が下る（坂道の上にいる）

以上のことを踏まえ、これまでの議論から、(34)のように考える。

(34) 言語主体にとって２つの出来事の「あいだ」が「生き生きとした時間」であれば（その場合、自分が何かをしているという意識はない）、時間・場所の大小に関わりなく、その間が主体にとってアクチュアルであれば、「いまーここ」とみなされる。

こうした観点から考えると、従来、「同時性」や「同一場所生起」といったものが HIR 成立の条件とするのは誤りだとする主張が、２つの出来事の「間」を、客観時間つまり均質な空間上の２点の大小などで捉えていると言うことができる。そうではなくて、問題なのは、主体と出来事（そこには、その参与者どうしの関係も含まれる）との関係を「いまーここ」においてどう捉えているかである。

例えば、(35a, b)は、《同一場所性は必要条件ではない》として、２つの節が表す事態が生じる場所は異なるのに OK になっていると言われる。

(35) a. [ミカンが裏山で採れた]のを家族そろって家で食べた。

b. [太郎がボールを蹴った]のが次郎にあたった。(Nomura (2000: 157))

(36) a. [裏山で採れた] ミカンを家族そろって家で食べた。

b. [太郎が蹴った] ボールが次郎にあたった。（２つの出来事）

しかし、(35a, b)と比べると明らかなように、(36)は明らかに２つの出来事からなっているのに対して、(35)にあっては、２つの出来事の「間」には、 (35a)ならばミカンの採取と食味までの共有された時間といった時計時間では計れない生き生きとした時間が感じられる。(35b)には２つの出来事が偶然にも出会うタイミング（間の悪さ、あるいは狙い通りか）の場合である。

(37) (38)は、《同時性解釈は必要条件ではない》 として、別々の時間表現が関与しているが、許容されている例としてあげられているものである。((37a)は Nomura (2000: 145))

(37) a. [２年前見た時にその物件が売られていた]のが今日見たらまだ売れ残っていた。

b. a. 朝市でイカを買ってきたのを晩御飯の時に刺身にして食べた。尾谷 (2001)

(38) a. [２年前見た時に売られていた] その物件が今日見たらまだ売れ残っていた。

b. 朝市で買ってきたイカを晩御飯の時に刺身にして食べた。（２つの出来事）

外在主部の形式(38)は、明らかに２つの出来事であるのに対して、(37)では、２年間は時計時間のように計測されるものではなく、「その物件」の２年の間の状況の変化がひとつのものとして捉えられているのである。こうした言い方をする以上、２年前に興味があったがその余裕もなかった、しかし今なら買える、といったように言語主体との関係が含まれていることも考えられる。(37b)についても、丁度いいのが手に入った、材料集めから調理まで一貫した時間が意識にあるはずである。(38b)は他の人が買ってきたかもしれないが、(37b)では話し手自分で買ってきたとするのが一番自然であろう。「ひとごと」でなく、「わがこと」としてのこだわり。

(39) a. [社長が明日その部屋を使う]のを社員たちが今日徹夜で掃除する。(Nomura 2000)

b. [社長が明日使う] その部屋を社員たちが今日徹夜で掃除する。

(39)でも、(39a)にあっては、社長の部屋の使用は（社員の立場からすれば）「いま」の（自分の）問題である。

(40) [Y 教授が N 教授に５年前著書を謹呈した]のが古本屋で売られていた。(Nomura 2000)

(40)では、あのときの同じ古本がどうして古本屋にあるのか、２人の教授の人間関係はどうなのかとか、そういったことがこの文のなかに読み込める。

(41) [あの星から四百年前光が発した]のが今地球に届いている。(Nomura 2000)

(41)でも、四百年前の光と今の光は同じ光。悠久の長さも「いまーここ」として思いをめぐらす。

次のような状態変化とされる例 (Tonosaki (1996))や「の」と「やつ／もの」との交替も、実は意味が違っていると考えられる。(42)で「オタマジャクシ」の成長や黒砂糖の個体からそれを溶かす経過を考えたとき、それはひとつのものである（こう考えれば、HIR と区別する意味がない）。しかし、その結果だけを考えれば、それは完結体（実体）として「もの」や「やつ」と交替可能になる。これは、結果かその経過かによって「の」の文法機能が異なることを示す。

(42) a. [[オタマジャクシがカエルになった]の]が庭を跳ねている。(オタマジャクシの生長史)

b. ジョンは [[黒砂糖を溶かした]の]を団子につけて食べた。（手間をかける）

5. 「が」はどうして生じにくいのか：「ナル」の出自=自発自展（世界からの視点）

「が」は HIR として生じにくい（cf. 坪本 (1995), Ohori (1995)）。(43)のような自発の場合は許容しやすい。この理由は、(32)で見た「世界からの視点」に立てば、世界の自発自展と共鳴する言語表現と言うことができる。すべて同じものの状態変化（自己対比）である。

(43) a. 雨が激しかったのがおさまった。　　（おのずから：自発）

b. すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れていたのが、急に静まり返って、人声どころか足音もしなくなった。　（『坊ちゃん』）

c. おじいちゃんがおもちゃを買ってくれたのが、もう壊れてしまった。

d. 光秀が天下を取ったと喜んでいたのが、あっという間に殺された。

主部がない例とされる(44)のような場合や (45)の場合も自己対比であり、自己認識である。つまり、世界の自己展開は、言語主体そのものの自己対比であり、自己を知ることになる。

(44) a. 今朝顔を剃ったのが夕方にはまた伸びてきた。自己対比（同じ顔の状態変化）

b. 鼻が低いのを直した。（整形しても同じ鼻）（Nomura (2000)）

(45) 土地と株券が少しばかり残っていたのが、値上がりして相当の額になった。（金持ち）

6. 結語

キュビズム

キュビズムは、対象を同時に把握する、複数の異なる視点を前提にしている。

ここで取り上げた、いわゆる主要部内在型関係節構文（およびト書き連鎖）は、時間と密接に関係する。時間はそもそも連続体であり、分割をゆるさないものであり、だとすれば、部分を組み合わせて全体の構文を考察するやり方では、この構文がもっている本来の意味が抜け落ちるのではないかと思われる。２つの出来事の意味的語用論的関係を考えるにしても、まず２つの出来事を設定し、その「間」を考える方法は、時間の関係というよりも空間的な捉え方ということになる。この構文の本来の出来事それ自体に内在する時間・空間の関係は、部分から全体ではなく、全体から部分の方向で考える必要がある。従来の見方は、２つの出来事を別々に見てその前後関係を問題にしたりしているのであり、主体にとって、現場に密着した「いまーここ」の問題として捉えられるかぎり「同時的」（「同一場所」）であると考えることができる。その反映として、この種の構文は、２つにして１つ、１つにして２つの関係として特徴づけられる（キュビズム。分離不可能で身体的。cf. 坪本(2009)）。ト書き連鎖がクローズアップの機能をもつとすれば（坪本 (2009)参照）、HIRは、「語り手」にとっては本来全体としてひとつなのであるが（プロット）、「語り」において、２つの出来事の「間」の時空間が伸び縮みすることで、ダイナミックな効果を受け手と共有する。言ってみれば、スローモーションあるいはハイスピード撮影の機能をもつということができるかもしれない。いわゆる、主要部内在型関係節構文の成立には、異質な時間の流れを含む「同時性」（および「同一場所性」）が関わっている。それがこの種の構文に見られる、独特の「間合い」の出自であると考えられる。ここでは、流れをとらえつつ、言語の分節化を考えるために、双対的なスキーマ（これは、数的には「双数」にあたる）が重要な意味合いをもち、この構文のもつ「両義性」を媒介する。

参考文献（紙幅の関係から本文にも記載）

Bolinger, Dwight（1967） "Adjectives in English: attribution and predication," *Lingua* 18, 1-34.

Foley, William and Richard Van Valin (1984) Functional syntax and universal grammar. Cambridge Univ. Press.

Fuji, Masaki (2000) “Stages as entities: a stage-level E-type pronoun in Japanese,” 東京商船大学研究報告、５１号、89-102.

Hopper, Paul and Elizabeth Traugott（1993）*Grammaticalization.* CUP.

Kuroda, S,-Y. 1975-76. “Pivot-independent relative clauses in Japanese,”(II) *papers in Japanese Linguistics* 4, 85-96.

黒田成幸（1999）「主部内在型関係節」黒田成幸，中村捷.（編）『ことばの核と周縁』くろしお出版. 27-103.

堀江　薫+プラシャント・パルデシ (2009)『言語のタイポロジー』研究社.

三原健一・平岩　健 (2006)『新日本語の統語構造』松柏社.

Nomura, Masuhiro (2000) “The internally-headed relataive clause in Japanese: a cognitive grammar approach.” Doctoral dissertation, University of California, San Diego.

尾谷昌則 (2001) 「主要部内在型関係節の成立条件とプロミネンスによる項選択」 KLS 21

Ohori, Toshio (1995) “Problembs of Japanese IHRCs: argument linking and reference tracking,” *Language, Information , Text*. 東京大学大学院総合文化研究科（編）89-108.

柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館.

鈴木　猛 (1991) 「付加詞が補部として機能する場合」『現代英語学の諸相』開拓社.

Tonosaki, Sumiko (1996) “Change of state head-internal relative clauses in Japanese,” 『言語科学研究』2, 31-47.

Tsubomoto, Atsuro. 1981. "It's all no: unifying function of NO in Japanese," CLS 17,　393-403.

坪本篤朗（1994）「文連結の認知図式—いわゆる，主要部内在型関係節の形式とその解釈」『日本語学』79-91.

_____（1998）「文連結の形と意味と語用論」中右実（編）『日英語比較選書　第３巻：モダリテイと発話行為』研究社出版.　99-193.

_____ (2001) 「モノとコトの文法−−−文法と意味の接点」筑波大学学位論文.

_____ (2009) 「存在の連鎖と〈部分〉／〈全体〉のスキーマ——「内」と「外」の〈スキーマ〉」『「内」と「外」の言語学』（坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編））299-351.